

タイトル：2022 年度 研究セミナー（第 23 回）

日時：2022 年 12 月 17 日（土）～18 日（日）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階マルチメディア会議室（304）

「1830 年代ムハンマド・アリー政権によるシリア統治の手法：監視の仕組みに着目して」
藻谷悠介

（大阪大学大学院人文学研究科特任研究員／東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

東京外国語大学 AA 研のセミナーで報告をするのは、修士 1 年時の教育セミナー以来 7 年ぶり 2 度目となりましたが、前回と同様、今回のセミナーでも報告を通して大変多くの収穫がありました。以下では、感想と評価を簡単に述べたいと思います。

今回の報告では、博士論文の 1 章分の内容を、博士論文全体の構想と共に報告し、先生方から忌憚なきご指摘を多くいただくことができました。アラブ近代史を研究する自分にとって、AA 研の先生方には専門とする地域や時代が近い方がとても多く、自分の研究を報告する場としてこれ以上のものはなかったと考えております。また、偶然にも他の参加者もよく知る同学の近現代史研究者であり、参加者同士での議論も非常に実りあるものとなりました。加えて、小倉先生によるご自身の博士論文についてのご発表も大変興味深く、博士論文提出後のことまで含めて多くの学びを得ることができました。

評価については、これまでも多くの方が指摘していらっしゃることはありますが、やはり本セミナーが博士論文を見据えた報告と議論の場として設定されていることの意義が非常に大きいと考えています。一般的な研究報告では、報告の主題に関する議論が中心となりますが、本セミナーでは博士論文の中でその主題をどのように位置づけるか、という点にまで議論が及びます。また、一つの独立した研究として論文投稿などを目指すことよりも、まずは博士論文の一部として完成させることを優先して議論が進むため、博士課程の学生にとって有益かつ実践的な場であると言えます。

また、コロナ禍を経た今、本セミナーが再び対面で開催されたことの意義も強調しておきたいと思います。博士論文の執筆は往々にして孤独な作業であり、コロナ禍によってその傾向はさらに強くなったと言えるでしょう。この作業を継続するために求められるのは、博士論文に関する指導・議論・情報交換だけではなく、同じように執筆に取り組んでいる博士課程の学生同士の交流であるということを、今回のセミナーを経て確信した次第です。昼食時の他愛ない会話ですら、コロナ禍を経た今ではとても貴重なものであり、今後の執筆作業に向けて刺激と活力を与えてくれるものとなりました。対面開催にはリスクとコストが少なからず発生するものとは存じますが、来年度以降も対面で本セミナーが開催されることを強く願っています。

最後に本セミナーにて多くの貴重なコメントをいただきました AA 研の先生方、並びに本セミナーを企画・運営してくださった FSC 事務局の皆様に、心よりお礼申し上げます。